

特集 「国立大学法人お茶の水女子大学」の出発

お茶の水女子大学 学長 本田 和子



「国立大学法人お茶の水女子大学」誕生おめでとう！

ここ数年、国立大学は、法人化の可能性を巡って、あるいはその是非に関して、様々な論議をくりかえしてきたが、漸く、その幕が上がった。本学は、統合も再編もせず、一・二九年の歴史に幕を降ろすこともなく、「国立大学法人お茶の水女子大学」としてスタートする。国籍年齢を問わず、学ぶ意欲のあるすべての女性のために、その真摯な夢の実現の場を目指して……。とりあえずは、その出発に祝意を表しておこう。

法人化の必然として、大学には制度設計上の種々の変化とそれに伴う運営上の変革が要求されよう。ところで、それらをプラスに機能させ得るか、あるいは、ただマイナス要因とのみ機能させてしまうかは、ひとえに個々の法人と大学の構成員の力量に委ねられている。

国立大学のすべてが、国の方針によって、しかも、国家的目標と国家による予算運営のなかで守られていた時代、世に言う「護送船団方式」は終わった。これからは、個々の大学は自ら固有のミッションを掲げ、その実現に向けて努力することが要求される。しかも、その成果を国民の前に説明する責任が生じ、国民の付託に応え得たか否かを評価されねばならない。法人化後といえども、個々の大学が少なからぬ国費で維持されている以上、このことは当然果たさねばならぬ責務に他ならないだろう。

「中期目標」を明文化し、それに伴う「中期計画」を具体的に掲げて公表するのもこのことに由来する。本学のような小規模大学であっても、年間数十億の国費を消費するからには、それをどのような目的のために、どのような目標を掲げて、どのような計画に行使するかを説明することは、当然と言えば当然の義務に過ぎない。従来、それを怠ってきたこと、つまり、「国立大学」という特権の下に、多少なりとも自己満足的な閉じられた営みに終始してきたことこそ反省すべきであろう。もちろん、「学術文化の探求」なるものが、少なからず自己満足的な営みであり、その自己満足的な営みの結果として、人と社会に貢献し得る成果

が得られるということも、また、一面の真理ではあるけれど……。

本学は、わが国最古の女子高等教育機関として、小規模ながら一定の研究レベルを維持し、優れた女性の育成という教育成果を上げてきている。今後とも、この伝統を踏まえ、従来にもまして、女性の成長に相応しい教育研究の環境を用意し、「教育と研究」双方のバランスを取りつつ、女子の資質能力の開発とその社会的還元という使命を達成していこうとしている。男女共同参画が謳われ、持続可能な社会の発展は女性の参画抜きに達成し得ないとされながら、その動きの究めて鈍いのがわが国であることを思うなら、指導的な女性の育成は、新しい時代が求めるグローバルでかつ国益にも適った重要な課題に他なるまい。したがって、この課題達成のために、国費が充たされることは究めて当然と肯定し、本学が女子大学として存在することに意義があると自画自賛して置くこととしよう。

というわけで、とりあえず、存続意義も明確化されたし、目標も定まった。あとは、一同、心を合わせて努力するだけ……。幸いなことに、現在の本学は、よく足並みの揃った大学として評価されている。ある識者によれば、法人化の仕組みが成功するのは、「小規模」で、ある程度「レベルが高く」、「大都市に存在する大学」であるという。となれば、本学こそその好適例。ならば、前途洋々、かつ多難、あるいは、前途多難、かつ洋々……。ま、ともあれ、法人化を好機到来と捉えて、元氣よく船出することとしよう。